

---

# 契約と誓い

月野将行

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

契約と誓い

### 【Nコード】

N5747P

### 【作者名】

月野将行

### 【あらすじ】

上松市に住む十六歳の少年、尾賀純一おがじゅんいちはこれといった取り柄もなく、普通な高校生活を送るはずだったが、勉強、運動、ルックス全てにおいて並の彼は不本意ながらも日常的な高校生活と非日常的な高校生活の両方を体験していくことになってしまふ。

更新まばらだしタイトルまだ未確定だしですが、一応がん

ばります。

## プロローグ『海に浮かぶ影』

空には厚い雲がかかり、せつかくの満月が顔を引っ込めてしまい辺りは暗い。

海は荒れて強い波がたち、真っ暗な沖合で明かり一つ点けていない巨大な船を大きく揺らす。

まるで海神ポセイドンに弄ばれるように揺れる船、その側の海面が不自然にパシヤンと跳ねた。暗くて見えづらいが、そこには何かがちラチラ光っている。海面から二十メートルはある甲板からでは目視できないが、潜水スーツを着込んだダイバー達が懐中電灯を片手にプカプカと浮いているのだ。

真っ暗な海面に浮かぶダイバー達は手に持つ懐中電灯を頭に固定すると、荒れる海を警戒しながら静かに海面から姿を消した。

## 第一話『雨の日の拾いもの』

六月十日の金曜日。

山口県南東部にある風篠市。周防灘に面する人口十五万人超の市だ。そんな風篠市は梅雨の真っ只中。空は厚い雲に覆われ、今にも雨が降り出しそうになっている。空気はじめじめとして蒸し暑くなり人々の不快を誘い、それから逃れるように部屋の中にある除湿器やエアコンを起動させて湿気を除こうと試みる。

だがそんな行動を選択できない者達がいた。彼らは一つの部屋に押し込められ、前に立って弁を振るう年上の人物の話をしつかりと聴いて学ぶという仕事があるのだが、如何せん蒸し暑い空気のせいで彼らのやる気は著しく下がってしまう。そのため、机に突っ伏して睡魔に負けてしまう者もしばしば。

「おーい、起きろー」

二年三組の教室での六時限目の授業中。回ってきた教師に教科書で頭をパカッと叩かれ伏せていた生徒達は渋々頭を上げる。

「梅雨で気が乗らないのはわかるが俺だって怠いんだ。後十五分だから頭上げてろ」

「ふわぁ……………」

国語教師の台詞に尾賀純一は欠伸をしながら目を黒板に向け、意識を失っていた間に進んだ所をノートに写し始める。彼は前から四列目、窓際というよさ気なポジションに座っていた。(面倒臭い……………)

純一はため息をつきながらさっさとノートに写していき、それを終わると窓の外へと視線を向け何とは無しに視線を下へと向ける。

マンガみたい運動場が見えるわけでもなく、視界に入るのは真横に建っている理科棟だけだ。

今は六時限目、つまりこの後は十五分間清掃して下校となる。残り十五分、授業に集中する気もならず、前に立つ教師の目を盗んで

携帯電話を机の下で開きニュース一覧を開いた。

(占いか……)

画面の下に表示された星座占いのページにリンクしたアイコンを押すと彼の星座であるさそり座の占い結果が表示された。今日は七位らしい。純一がそれを目で追っていくと、こんなことが書かれていた。

人生の転機が訪れるかも。日頃と違う動きをすれば、貴方の道はころっと変わってしまいます。それがいいこととは限りません。いつもと同じ行動を心掛けましょう。

(人生の転機、ねえ……)

読んだ割にそこまで深く考えずニュースの一覧に戻り、適当に流し読みしていく。まあ占いなどそんなものだろう。

「はい、今日はこれで終わり。学級委員」

起立、気をつけ、礼の三単語を学級委員が唱え、クラスメートはそれに倣って礼をする。

いつも通りの生活だ。そう、純一は思った。わざわざ心掛けるまでもなくいつも通りに今日も終わる。清掃場所がトイレの純一はさつさと終わらせるために教室を出た。

彼の通う神代高校は一学年八クラスで各学年三百二十人の学校だ。七組までが普通科、八組は理数科で構成され、普通科は二年になると文理選択によって理系と文系にクラスが別れる。ちなみに純一は文系だ。

三年生は第一棟に、一年生と二年生は第二棟に教室があり、第一棟と第二棟の間に職員室や保健室などがある本館、体育館が建てられているのだ。だが二年生である純一達が利用する第二棟は現在耐震工事をしており、そのため彼が今いる校舎はその工事の間仮設されたプレハブで、いかにも仮設といった感じに壁が薄く、隣の教室での授業や休み時間の生徒達の声が丸聞こえになっている。

純一が向かったのは隣の理科棟、その二階にある男子トイレが彼の清掃場所だ。本来トイレは三人で清掃をするのだが、純一以外の二人はごみ捨てと称してエスケープを決め込んでいるためここの清掃はいつも彼一人でやっている。

別段尾賀純一が生真面目人間というわけではない。一人になつてもきちんやるのは他にやることがないからで、清掃も便器の水を流しながらブラシを擦るだけで大きい方をする便器などやってすらいない。

一通り便器を擦ると純一は首を横に捻った。パキツと小気味良い音が鳴る。

(こんなもんか)

勉強、運動は並。面倒臭がりで積極的に何かをしようとするのではなく、冴えないとまでは言わないものの、かっこいいとは誰も思わないような容姿。

そんな普通で地味な高校生をやっている純一はブラシを掃除ロツカーに戻して廊下へと出た。

トイレの入り口にある手洗い場。その上にある窓越しに見えるのはザーザーと地面に向かって降り注ぐ無数の線。

「面倒臭……」

ため息とともについそんな言葉が口から漏れた。理由は簡単、帰りに濡れるのが面倒臭いのだ。今日は金曜日だからいいが、神代高校の生徒、略して神高生の持つ青色(女子は紺色)の神高バッグが濡れてしまい、さらに次の日が平日なら急いで乾かさなければならぬからである。

残念そうに肩を落とした純一は下の階に降り、プレハブ校舎へ戻ると自分の神高バッグを肩に掛け、下駄箱で靴を履き黒い色の傘を持って外へ出た。

清掃十五分の間はかなり降り出したようで、地面にたたき付けられた雨水が上に向かって跳ね上がっている。おかげで上からの水は防げても下からの水は防げず、ズボンの裾があつという間にびしょ

濡れになってしまった。

「これじゃあ岩徳も動きそうにないな」

純一はこの風篠市の神代にある神代高校に通ってはいるが、住んでいるのは隣の市の上松市だ。人口五万超の上松市は南部の海岸線沿いを山陽本線と国道百八十八号線が、中央部をJR岩徳線と国道二号線が走っており、彼はいつも岩徳線に乗って登校している。ただ、岩徳線は一時間に一本くらいしか動かず、雨にも弱いためすぐに止まってしまうというなかなか不便なもので今日のような天気の日にはバスに乗るしかない。

バスは岩徳線に比べるとやはり遅いのであまり乗りたくはないのだがこの際しかたがない。

神高前のバス停で立ち尽くすこと数分。彼の住む団地、西陽団地へ向かうバスが神代駅のほうからやって来た。

このバスは三・四時間に一本しか来ないのだが、学校が終わって少しの時に一本あるため、帰宅部の彼は長時間待つことなく乗ることができなのだ。

傘を閉じて乗り込むと、ほとんどの座席が埋まっていた。何人か前のほうで吊り革や手摺りを握っている者もいる。バスカードを差し込み口に入れて再び回収すると、空いている席がないか首を巡らせた。運よく右側の二人掛けの席が空いているのが見つかり、窓側に詰めて座って傘を膝の横に、神高バッグを膝の上に置く。

純一はバスがすぐに発車したのを体で感じながら神高バッグからイヤホンを出すと耳に付け、それをウォークマンに繋げて音楽を聞きはじめる。

最近ではポルノグラフィティの歌をよく聴いている。深い理由があるわけではなく、何となく今の純一のブームだけでまた少ししたら変わるのだろうか。

バスに揺られること数十分。西陽団地のバス停に着き純一は降りた。バスが走っている間に雨はひどくなっていて開いた傘に弾丸のように降り注いでくる。強い雨とむっとくる湿気の臭いに辟易し

つつ家へと向かう純一。

「帰ったらシャワーだな」

そんな無駄な決心を固めて純一は歩く。

しかし、彼のその決心はすぐに無駄に終わることになる。

「何だあれ……？」

彼の家の壁に大きなぼろ雑巾が落ちていた。雨でびちゃびちゃになったそれはもこつと膨らんでいることから何かを包んでらしい。

誰かごみを捨てていきやがったなと顔を渋くするが、放置しておいても気分のいいものではない。持って入って処分するため純一はそれに近づきぼろ雑巾を持ち上げる。

「……は？」

思わず出た言葉がそれだったのはしかたのないことだった。まさかそんなものが落ちているとは誰が考えるだろうか。

最初に目についたのは水を吸って無造作に散らばった灰色の長い髪。その長い髪が纏わり付いた本来は白くてかわいらしいであろう青ざめた小さな顔。

「人……間……？」

落ちていたのは、ぼろ雑巾以外何も身に纏っていない小さな女の子だった。

## 第二話『オセロ』

目の前にある非現実的な光景に純一はしばらく立ち尽くしていた。ザーザーと降る雨音と倒れている灰色の髪をした少女以外、外界から何の情報も入ってこない。

歳は小学校低学年くらいだろう。家出でもした少女が倒れているのかと思ったが、それにしても長い間何も食べていなかったように少女の頬やぼろ布から覗く白い肢体は痩せこけており、生きているようには見えない。家出ならここまで衰弱しきってしまう前に家に帰るだろう。つまらない意地やプライドなど生物の生に対する執着に比べればあまりに脆弱なものだ。だが今はそんなことはどうでもいい。

(死体発見とかごめんだぞ！)

純一は自分が濡れるのも構わず傘を少女の上に翳して雨を防ぐと彼女の頬を小さく叩いた。「おい、おまえ大丈夫か？　おい」

返事はなかった。だが、彼女の睫毛が不快そうに小さく揺れ、叩かれた頬と逆のほうへ僅かに顔を逸らしたのを純一は見逃さなかった。

生きてると分かった後の彼の行動は素早かった。傘を豊んで肩に担いでいる神高バッグに引っ掛け、ポケットに入っていた家の鍵を右手の人差し指と中指で挟み、びしょ濡れの少女を両腕で抱え上げて自宅へ急ぐ。さつき指で挟んだ鍵を鍵穴にねじ込み無理矢理回して玄関の扉を開けて中へはいった。

一度少女を降ろすと神高バッグと傘を投げ捨て再び抱えて風呂場へ向かう。

「つと、温度温度！」

水を温めるボイラーの温度調節のパネルは台所にある。少女を片腕と片足で支えそれを連打する。

『熱いお湯が出ます』

「よしっ」

最高温度の七十五度に設定し今度こそ風呂場へ急いだ。

脱衣所で水分を吸って重くなったばる布を剥ぐ。当然少女の白い裸体が現れ、反射的に目を逸らしてしまいが今はそのようなよこしまな雑念を抱くようなひまはない。

タオルなどを入れている五段の青いカラーボックス、その三段目からバスタオルを取り出し彼女の髪、体を大雑把に拭き冷たい水を除去する。今からシャワーを浴びせるから全部を拭き取る必要はない。あくまで冷たい水を取るだけだ。

髪以外がほしい乾くと風呂場へ入りシャワーの捻りを回した。

焦っていたせいでシャワーの口がこつちを向いているのに気付かずに冷水をもろに顔面にくらうが、すぐに他所へ向け温度調節の捻りを回し温度を上げた。

制服姿のまま風呂の小さな椅子に腰掛け自分の両足の間に少女の腰を落とし、左手で彼女の背中を支え座らせる。

だが冷めた体に突然温かい湯を浴びせるのは心臓に響きかねないので、三十五度くらいにすると足先からかけ始め、ゆっくり上へ上へと上げていった。

「……ん？」

腹辺りに湯をかけていると、気のせいかわ腕の中で少女が動いた気がした。

もしかと思い湯をかけながら少女の体を揺すってみる。

「おい……おい！」

揺すりながら声をかけること数度、少女は喉を震わせ唸った。意識は戻っていないものの、回復してきてはいるようだ。

無理に起こさないほうがいいと考え、そのまま腕、胸、背中に湯を浴びせていく。そして次は髪とばかりに彼女を少しのけ反らせ顔にかからないよう髪をかきあげた。その際、のけ反らせたことよって張った小さな胸に一瞬目がいったことに自己嫌悪しつつ灰色の髪をシャワーで洗う。

その時、妙なものが髪の間から姿を現した。

「何だこれ……」

体の一部としてあつて当然なもの、つまり耳。きちんと頭の左右両端についている。だが驚いたことにその耳は丸みを帯びておらず、ナイフのようにピンと尖った形をしていたのだ。

枝垂れ柳のように床に向かつて垂れている耳は、どう見ても普通の人間のそれではない。

「……くしゅっ」

少女が小さくくしやみをした。純一は慌てて彼女の髪を流し風呂場から出る。

さっきのカラーボックスから再びバスタオルを引っ張り出して彼女の体を拭き（雑念を必死にかなぐり捨てながら）、一度その場に降ろすと自分もカッターシャツとＴシャツ、それと靴下を脱ぎ洗濯機に入れた。このまま少女を抱えたらまた濡らしてしまうからだ。靴下に関しては床が濡れてしまうからだ。

少女を抱えてリビングへ行き、ソファの上に置かれた自分の寝間着用のよれつた白いＴシャツを見つけたのでそれを着せた。小さな彼女にはでかく膝まで隠れているが、彼女の下着がない今それは好都合だった。髪はまだ湿っているが、それは後でいいだろう。

「へっくしー！」

今度は純一がくしやみをした。ちなみに今の彼は少し濡れた状態の上半身裸でズボンは今にも滴が垂れそうなくらい水を吸っている。

（このままじゃ俺が風邪ひいちゃうな……）

リビングと反対に位置する座敷に着替えがあるので純一はリビングを後にし、濡れたズボンとパンツを脱いで白いＴシャツと赤の短パンというラフなものに着替えた。

脱いだズボンとパンツを手に脱衣所に行つてさっきそこらに放つておいたバスタオルと一緒に洗濯機の中に放り込み、カラーボックスの一番上からタオルを二枚出して、その内の一枚で頭を拭きながらリビングに戻った。

「…… Bemoi?」

「え?」

耳慣れない声と言葉に純一はソファーに目を向けた。どうやら少女が目を覚ましたらしい。だが、彼女が目を覚ましたという事実よりも気になる点があった。

「オッドアイ……?」

左右の目の色がそれぞれ違ったのだ。右目が白、左目が黒という妙なもので、頭を白内障という言葉が過ぎるが「いや、あれは何も見えなくなるだけだったか?」と首を傾げる。だがそんな純一の思想など少女は知る由もなく、いつの間にか知らない場所にいることが怖いらしく、純一のことを脅えた様子でじっと見つめている。

「目が覚めたか。寒くはないか?」

「…… Bemoi Ina tell? Ce zang nee

izark benew tell venis……」

「……通じてないな」

純一は困った顔をするが、とりあえず彼女の濡れた髪を乾かしておきたい。使っていないタオルを手にソファーに近づこうとするが、途端に少女は泣きそうな顔をして純一と逆のほうへ体を寄せてしまふ。よっぽど純一が怖いらしい。だがここから逃げ出すほどの体力もないようだ。

なんとか意思を伝えようと、自分の頭を拭いてそのあと少女を、正確には少女の頭を指差し今度は持っていたタオルを示す。すると少女は恐る恐る自分の頭に手をやった。

(伝わったか……?)

タオルを差し出しながら再び歩み寄ると、脅えてはいるもの今度は身を退いたりしなかった。

「風邪ひかないうちにならそれで頭を拭いておいたほうがいい」

伝わらないとわかっていつつそう言ってタオルを差し出す。すると少女は純一をじっと見つめながらそれを受け取り、目だけは彼から決して離さず頭を拭きはじめた。

「そつだ」

純一は思い出したように呟きくると背を向け台所に行く。少女が一瞬ビクツと反応したがそれを気にしては何もできない。

リビングから見える台所で純一が何かしているのを少女は目で追いつづける。途中、ぶおーと何やら奇怪な音がして彼女は震えたが、しばらくすると純一が手に何かを持って戻ってきた。右手に白い器を、左手に何か袋を提げている。

「ほら、お茶だ。レンジでチンしたからあったかい……って、わかんねえよなあ……」

手にあるコップを口につけ、小さく煽る。その様子を見て何を伝えたいのか察してくれれば、と純一はコップを少女に近づけた。

「Shalzuence geana?」

何を言っているのかわからないが意図は理解してくれたらしく、コップを両手で受け取りやはり目だけは純一に向けたまま口につけた。そのまま口に含みごくりと飲み下す。そして少女がほう、とため息をついたのを見て純一は思わず笑みをこぼしてしまう。

今度は逆の手に持っていたビニール袋を開けた。中に入っているのは大きめのメロンパン。中から取り出すと小さくかじりつき、もぐもぐと口を動かして食べ物だということをアピールしてからそれを少女に手渡した。

最初に比べて警戒心が薄れているらしく、目は純一から離さないもののメロンパンを受け取るとすぐに口に運んだ。

「……！」

小さな口で数回咀嚼すると、驚いたように一瞬目を丸くし次の瞬間には猛烈な勢いで食べ始めた。あまりの勢いに少女は胸を詰まらせそれをお茶を流し込んで一息ついた。

「ほら、全部食べていいよ」

袋ごと差し出すと、今度は躊躇わなかった。中から掴み出してそれを頬張ると、純一から目を離して一心に口を動かしている。やっぱり腹空いてたのかと彼女を心配すると同時に、自分の行動が間違

つていなかったことを純一は少し誇らしく思った。

「Tシャツだけじゃ風邪引くかな……」

座敷の押し入れから毛布を取ってこようとして、

「Demoi……」

少女が食べながらぼそつと何かを呟いた気がして純一は振り返る。すると、驚いたことに少女は口を動かしつつ肩を震わせ、しゃくりあげながら涙を流していた。

「ちよ、えつ……!?!?」

唐突なことに純一は理解できなかった。もしかしてメロンパンがまずかったかななどと不安になったが、言葉が通じないままではそんなこともわからない。

右手にコップを、左手にメロンパンを持ったまま泣きじゃくる少女に純一は戸惑うばかり。このままではわけがわからないままいつまでも泣かれてしまいかねないので、純一は思い切つてある行動に出た。

「大丈夫か……?」

「……!」

少女の頭に手を置き撫でると、一瞬肩を震わせるも純一を白の右目と黒の左目から涙を流しながら見つめるだけで、特に逃げたりするようなそぶりは見せなかった。

頭を撫でながら膝を屈め視線を合わせて微笑みかけ、怖がらせないように静かに話しかける。

「おまえをどうこうする気はないから安心しろ。パン、まずかったんならごめんな」

すつと純一は立ち上がると向かいの座敷へ行き、仏壇の横にある押入れの戸を開いて中を漁る。中は上下の二段になっていて、上の段には毛布が積まれている。重なつてちよつと高い位置にある毛布を引っ張り出そうと純一は背伸びをして、

「neu……」

「おわつ!」

不意に背後からした声に思わず跳び上がった。その時に上下に隔てる板を膝蹴りしてしまい、純一は声にならない悲鳴をあげる。

「……ど、どうかしたか？」

じんわりと目に涙を浮かべながら膝を押さえ、後ろを振り返った。そこには案の定、オッドアイの少女が部屋の入口の壁に寄り掛かりながら立っていた。お茶とメロンパンは置いてきたらしい。不安そうな目で純一を見つめている。

「Bece s zang tel jer……？」

「……ああ、毛布取りに来たんだよ。Ｔシャツ一枚じゃ流石に寒いだろ」

今度こそ毛布を取り出し右の脇に抱えて少女の前でしゃがみ込んだ。

「ほら、戻るぞ」

少女を左腕で抱えて立ち上がり、ソファーまで連れていくと座らせ、その上からそつと毛布を被せた。

「ゆっくりしてる。今から何か作ってやるから、それまでパンでも食べててくれ」

頭を撫で、ソファーに置いてあったメロンパンを持たせると台所へ行き、炊飯器の蓋を開ける。

「足りそうだな」

食器棚の下からフライパンを取り出しコンロに置いて火にかける。冷蔵庫から人参、ピーマン、玉葱、豚バラを出し、それぞれを適当な大きさに切り刻んでいく。

（あれ、フライパンに入れる順番ってどうだっけ？）

火の通り易さで順番があるのだが、

「ま、いつか」

適当に放り込み炒め始めた。少しして炊飯器に入っていたお冷やをぶち込み適当に塩と胡椒を振り掛け木製のしゃもじでぐしゃぐしゃと掻き混ぜる。

完成。

「焼き飯くらいしか作れないんだけどな……。あちつ、……。うん、まあこんなもんだろ」

味見の際に舌を火傷してしまったが味はよさそうだ。純一は一人で納得し、皿に焼き飯を注いで少女の元へ戻る。

不思議そうな顔をする少女の前でスプーンで焼き飯をすくって息を吹きかけて冷まし、まずは自分の口へ入れた。先の火傷で少し染みたが焼き飯を怖がらせないよう努めて冷静な顔をする。

純一はもう一度すくいフーフーと息で冷ますと小さな口の前に持っていた。

「ほら、口を開ける。あーんだ、あーん」

目の前でやって見せたことが功を奏したのか、少女は小さく首を傾げながら口を小さく開けた。そこへ冷ました焼き飯を突っ込む。

少女は一瞬ビクツとするも、さっき純一が食べていたことを思い出したようにもぐもぐと口を動かしゴクンの飲み込んだ。

「Demoi……」

何を言っているのかはわからないが、嬉しそうな表情からしておいしいか何か言ったのだろう。

焼き飯をスプーンですくって冷まして少女の口に入れる。これを何度も何度も繰り返して、その度に少女は嬉しそうな笑顔を浮かべて口を動かした。

皿が空になってもまだ足りないのか、じっと台所のほうを凝視している。

「おかわりはまだあるからな。ちよつと待ってる」

少女の頭を軽く撫でて焼き飯を皿に足しに行きながら、大分警戒心が解かれたななどと思いつつあの少女はいつたい誰なんだと純一は首を傾げた。

（日本人じゃねえのは当たり前だし、かと言って英語話してるわけでもないよな？ 第一あの耳は本当に人間のそれなのか？ ゲームとかに出てくるエルフくらいとんがってるし……）

よくよく考えると身元不明で意思の疎通ができず、しかも人間と

断定することができない者をよく家に入れようとしたものだ。

面倒臭がりのと純一は、他人はおるか自分自身すらも興味がない純一は何に關しても真剣にやろうとはしない。適当にすませて終われば十分だからだ。だが、それには一つ例外があつたことを純一自身は気づいていない。

(ま、いつか)

深く考えてもわからないものはわからない。頭の中でいくら憶測に憶測を重ねても、それは結局のところ憶測でしかないのだ。

今は食べさせることが最優先と残りの焼き飯を皿に入れ、ソファ―でじつと座っている少女の元へ持つて行つた。

「追加持つてきたぞ」

さつきと同じように純一がスプーンですくい、息を吹きかけて冷ましてから少女の口へ運ぶ。この一連の動作を何度も繰り返し、少女は焼き飯を完食した。

今は満足そうな表情を浮かべてお茶を飲んでいる。

そんな彼女の頭に純一はぼん、と手を置いて撫で、少し屈んでゆつくりその体をソファ―に横たわらせる。

「……？」

「俺はちよつと勉強してくるから、おまえは少し寝てろ。ただでさえ雨に打たれて衰弱しきつてたんだ、体力回復させとかないとな」

純一は腰を上げ、玄関に捨て置いたままの濡れた神高バッグを手に脱衣所へ行き、カラーボックスからタオルを出して拭く。だが神高バッグは水をしっかりと吸っていてなかなか乾かない。

「教科書とかは無事だな。ビニール袋に入れといて正解だったか」

中のもを出して神高バッグを干したほうが早いかな？ と純一が迷っていると、

くいつと。赤い短パンが何かに引っ張られる感触がした。

「ん？ って、おまえ、何でここに？」

振り向くと、そこにはソファ―に置いてきたはずの灰髪の少女がいた。純一の短パンを握り締め、壁にもう片方の手をつけて立ちな

がら泣きそうな顔をしていた。

「B e n e w z a n g t e l l z a n g ……？」

(一人が不安だったのか……？)

純一はしゃがんで少女を抱え上げた。

「寂しかったんならすまん。ちょっと待ってくれな、すぐ終わらせるから」

ゆっくりと降ろして床に座らせ、少女の頭を小さく叩いてから神高バッグの中身を出す純一。少女を右腕に抱えると、神高バッグを左手にリビングに戻り神高バッグを椅子に掛け、また脱衣所へ行って筆箱やら教科書やらノートやらを左脇に抱え込む。

そのまま両腕を駆使ししつっ向かった先は二階にある自分の部屋。「よいしょっ、と」

ベッドに少女を座らせ、教科書の類を机の上に置いた純一は両肩をぐりんぐりんと回して疲れをとると、少女を両腕で抱えて寝かせ、その上にタオルケットを被せた。

「俺はここにいるから、今は安心して眠っとけ」

ベッドの横の勉強机に座ると少女の頭を優しく撫で、少女が少し笑ったのを見てから机に向かい数学の宿題を始めた。

夕方の六時過ぎになると、純一の母親、智美が仕事から帰ってきた。

『ただいまー』

「帰ってきたか」

純一は兄と姉が一人ずつの三人兄弟だ。だが兄は東京へ料理の仕事をしに行き、姉は石川県の大学へ行っているの、今は一人っ子のようなものになっている。

さらに、純一の父である直紀は十三年前に交通事故で世界しているので、智美が働いているのだ。直紀が生命保険に入っていないければかなり厳しい生活になっていたことだろう。

『じゅんちゃん、ちょっと降りてきてー』

階下から聞こえてくる母の声に純一は立ち上がり、

「ん？」

腰に何か引つ掛かったのか、机から離れられなかった。視線を下に落とすと、寝ていた少女はいつの間にか起きていたらしく純一のTシャツをしつかりと掴んでいるのがわかった。

どうやら知らない声に怖がっているらしい。

「でも、とりあえず母さんには教えておかないとな……」

少女をだっこして階下へ行くとリビングからガチャガチャと音がした。

「おかえり母さん」

「ただいま。じゅんちゃん、今日帰ってから焼き飯作ったみた……」

台所で純一に背を向け食器棚に手を伸ばしていた智美はそう言いながら振り返るが、息子の腕の中で震える小さな生き物を見た瞬間口が止まってしまった。

しばらくして、

「……誰、その子？」

「簡単に言えば拾った。詳しく言うなら家の前で雨に打たれて倒れてたから連れて入った」

「よくわからないけど……、その子、人間？」

少女の尖った耳、白と黒の眼という普通の人間ではありえないところに気づいたのだらう。眉間にしわを寄せながらそう尋ねられ、純一をしかたなく首を横に振る。

「わかんねえ。多分そうだと思うけど、言葉も通じねえから何考えてんのかイマイチわからん」

「そう……。その子、名前は……わかんないわよね、言葉が通じないんじゃない」

智美は台所から出てきて震えている少女を頭を撫でようとしますが、純一のシャツを一層強く握り、彼の胸に頭を埋めてしまった。どうやら予想以上に怖がられているらしい。

大丈夫だと言うように純一は胸で震える少女の頭を撫でる。

「大丈夫だ。母さんは怖い人じゃない」

「 Bemoi yen hollinop……? 」

見上げてくる少女に純一が微笑みかけ、純一のさっきの言葉を理解でもしたのか、不安そうにしながらも智美に目をやる。

「わたしは智美。純一の母親よ。よろしくね」

智美が頭を撫でた瞬間、ビクツと肩が跳ねらせたが、信頼しきつた様子ではないもののされるがままになる。怖くて動くことができないとも取ることができが。

「とりあえず座りましょう」

「ああ」

智美子に促され食事の時に使うテーブルの椅子に向かい合うように座った。もちろん少女は抱えたままだ。「じゅんちゃん」

智美が話を切り出した。まっすぐに目を見てくる母に対抗するように純一も正面から母の瞳を見つめ返す。

「単刀直入に聞くけど、その子、どうする気？」

「まずは警察に届けを出すつもり。で、保護者か、もしくはそれに準ずる誰かが見つければその人にこいつを返す」

「見つからなかったら？」

「うちに住ませたい。孤児院……児童養護施設だっけ、そこには容れたくないから、それならうちに住んでほしい」

目を下に向けると、腕の中で縮こまりながら見上げてくる少女と目が合った。純一が小さく微笑みかけると、少女はそれに答えるかのようにおずおずと笑顔を浮かべる。初めて見た少女の笑顔に純一は少し驚くいたが、彼女が笑ってくれたことが嬉しかったのか、純一はまた頭を撫で始めた。

「……そうね」

二人の様子を黙って見ていた智美は口を開き、立ち上がって電話の所へ行つて受話器を手に取った。

「まずは警察に聞いてみる。話はそれからね」

「うん。見つかるといいな、おまえの保護者」

「……? 」

少女は純一が何を言っているのかわからず首を傾げる。

「……はい、はい。……そうですか……ええ、その間はこちらで、はい。わかりました、それでは」

電話が終わったらしく、受話器を置いた智美が一つため息をついた。

「どうだった？」

「その子の捜索願いは出てないみたい。名前のわからない子を拾ったって届けはあったらしいけどね」

「じゃあ……」

智美は頷く。

「まあ、母さんも施設に容れたくはないからね。うちに住んでもらいますよう」

「ありがとうございます、母さん」

「いいえ。でもそれなら服とかその他諸々買ってこないといけないし……」

うーんと唸りだした母親を横目に純一は少女に言う。

「しばらくの間おまえは尾賀家の一員だ。これからよろしくな」

「ところでじゅんちゃん、あなたその子に名前教えてあげた？ 言葉が通じなくてもそれくらいは伝えられるでしょう」

母親に言われ、改めてこの少女に名前を教えてないことに気づいた。

ちゃんとわかるように純一は自分を指差し、ゆつくりとした口調で名乗る。

「俺は純一。じゅんいちだ」

少女が首を傾げる中根気よく教えていると、不意に少女が純一を見上げながら人差し指を彼に突き付け、おもむろに声を発した。

「……じゅん……い、ち……？」

ゆつくりと口にした初めて通じた言葉に大きく頷いて見せた。

単語程度ならジェスチャーを交えれば伝えるのも難しくはないのかも知れない。そんなことを思いながら今度は電話の前に立つ自分

の母親を指差して教えてみることにした。

「あつちはお母さん。おかあさんだ」

「おっか、さん……」

それを聞いた瞬間に智美は思わず吹いた。

「あはははははは！ まあそれも間違いじゃないけど……おっかさ  
んか……くくく……」

どうやらツボに入ったらしく腹を押さえて笑い出し、それを見て  
少女は不思議そうな表情を浮かべた。

「くくく……」

「……そろそろ落ち着いたら？」

いつまでも笑っている母親に少し呆れたように言う純一。

そうねと答えて三十秒、智美はようやく笑うのを止めた。

「はあ、はあ……あー笑った」

「そんなに面白かった？」

「ええ、最高に。それはそうとじゅんちゃん、その子の名前はど  
うするの？ いつまでも『おまえ』じゃかわいそうでしょ？」

「それもそーだよな。名前か……」

名前、と言っても純一はネーミングセンスがあるほうではない。  
最後に名前を付けたのが中三の時にやっていたRPGのゲームで、  
彼によって付けられた主人公の名はマイク。どうにもハンパなセン  
スである。

純一はしばらく首を傾げ、

「……花子」

「真面目に付ける気ないでしょ」

全国の花子さんに失礼だろなどと思いながらも純一は唸りながら  
考える。

すると、不意に腕の中で静かにしていた少女が手を伸ばし、純一  
の頬をそつと触ってきた。

「Bennewen pole zastenn……?」

「ん?」

驚いて純一が下を見ると、少女は不安そうにこつちを見ていた。どうやら突然唸りだした息子が心配になったらしい、智美は咄嗟にそう思った。

「……………」  
だが純一は少女の挙動に全く反応を示さずにしばらく少女をじっと見つめ、そして呟いた。

「オセロ……………」

「何、今なんて?」

「オセロだよ、母さん」

母親を振り返りながら純一は言う。

「ほら、こいつの目って右が白で左が黒だろ? ちょうどオセロじゃん」

「だからオセロ……………」

ああ、と真剣な顔で頷く息子のセンスに智美は苦笑いを浮かべることがなかった。

(もっと女の子らしい名前でもいいんじゃないかしら……………)

そんな智美の心情も知らずに純一は少女に、指を指しながらたつた今決まった彼女の名を告げる。

「おまえは今日からオセロだ。よろしくな、オセロ」

「お、せ……………」  
「オセロ。まあ、すぐには無理か……………」

少女、もといオセロの頭を撫でてやりながら純一と智美は笑う。

「……………」

きよとんとした表情をするオセロ。

この不思議な少女との出会いが尾賀純一という少年の平凡な日常を崩していくことを、この時の彼は知るよしもなかった。

### 第三話『今後の方針』

六月十一日、土曜日。

神代高校二年帰宅部の尾賀純一は、休日は七時半に起きることが習慣になっている。ベッドの横にある机の上で充電器に繋いだ携帯電話から、アラームとしてセットしてある Aqua Timez の『決意の朝に』の歌をモーニングコールに目を覚ました。

携帯電話の側面に付いているマナーモードの設定をするボタンを押してアラームを止めた。

ベッドに対し机と反対側にある黄色地に赤と青の円が描かれたカーテン。その外からはザーザーと雨が降り注ぐ音が聞こえ、まだ降ってんのかーと霞のかかった頭でぼんやりと考える。雨という梅雨を体現する音以外はいつも通りの休日の朝だ。たたし、

「すう……すう……」

純一の隣で静かに寝息をたてている灰色の髪をした少女を除けば、だが。

「あー、そーいや一緒に寝たんだけ……」

女の子だからと言って、智美がオセロと一緒に寝ようと純一の腕から引き取るうとしたのだが、純一から引き離されそうになると泣き出し、決して彼から手を離そうとしなかったのでした。かたなく一緒に寝たのだ。

純一のシャツをしつかりと握りしめるオセロは、ワンピースほどの丈になってしまっている純一のTシャツしか着ていないが、それでも蒸し暑かったらしく二人の上に掛けていたタオルケットがベッドの足元のほうで団子になっていた。

「風邪ひくだろ、つたく……」

起こさないようにオセロの手を静かにはずし、ゆっくりとベッドから降りてタオルケットを彼女の上に被せた。全く起きる様子はない。いつからかは知らないが、あの冷たい雨の中、裸同然の恰好を

していたのだ。衰弱はもちろん風邪をひいていたとしてもおかしくない程である。

「今はゆっくり休んどけ」

すやすやと眠るオセロの頭にそっと触れ、階下のリビングへ降りた。台所の食器棚からコップを取り出しコンロの上にあるヤカンから冷めたお茶を注ぐ。

「ふう」

一息つき純一はテーブルの上で無造作に置かれたテレビのリモコンで電源を点ける。が、主電源が入っていなかったらしく起動しない。少しイラツとした。

地デジ化が進んでいるこの御時世には少なくなったブラウン管のテレビの電源を足で点けた。

ブツツと接続音のような音がしてから待つこと二、三秒。休日の朝によくある子供向けのアニメが映し出され、テレビ本体に付いているボタンでチャンネルを変えていく。

「ろくなものがないな……」

日頃は智美が起きて朝食を作るまで、二階の自分の部屋で本でも読むのだが、いかせん机の隣にあるベッドではオセロが睡眠を貪っているため、下手に部屋の照明や机の電気スタンドを点けるわけにはいかず、本が読めなかったのだ。と、そこまで考えてから純一は気づいた。

(リビングで読めばいいんじゃない)

そうとわかれば話は早い。テレビの電源を消し、二階に本を取りに行くことにした、その時

尾賀家の中を一つの泣き声が響き渡った。

「ツー!？」

純一が慌てて階段を駆け上がると、横合いの部屋から智美がびっくりした様子で飛び出してきた。今起きましたと言わんばかりに目が半分閉じている。

「何、この叫び?」

「多分オセロだ……」

「じゅんちゃん、もしかしてあの子に何かしたの？」

「してねーよ」

(面倒臭い……)

馬鹿なことを言う母親を置いて自分の部屋へ急ぐと、ベッドの上で両目からぼろぼろと涙をこぼしながら泣くオセロの姿があった。所謂女の子座りというやつで、タオルケットを右手で握りしめている。

「じゅんいちー！　じゅんいちいー！」

どうやら純一がいないせいで泣いているらしい。純一は普通に中に入ろうとしたが、その前にオセロが先に彼の存在に気づいた。

「じゅんいち……？」

視界に純一を捕らえたオセロは一瞬泣き止み、

「じゅんいちい！」

「おわっ!？」

タオルケットを放り出して純一に飛びついた。といってもベッドから降りてよたよたとドアのところにいる純一の前まで来て、倒れかかってきたところを純一が受け止めた、と言ったほうが正確だが、純一にしがみついたオセロは何度も彼の名を呼びながら泣き続ける。

「じゅんちゃんにすっかり懐いてるわねえ」

振り返ると後ろで智美が二人の様子を覗いていた。

「母さん、朝ごはん作ってくるわ」

言うなり去っていく母親に、白い目を向けながら純一は少女の両脇に手を入れ、抱え上げた。

「一人にして悪かったな。悪気があったわけじゃないんだ、許してくれ」

片腕で支えながら頭を撫でてやっている、落ち着いてきたのか、まだ少ししゃくり上げているもののようにやく泣き止んだ。

充電器に繋いだままの携帯電話をポケットに入れ、純一達は智美

が朝食の準備をしているであろうリビングへ移動する。

六人掛けのテーブルの上には、すでに朝食が用意されていた。三つランチョンマットが敷かれ、その上にはご飯と肉じゃが、豚汁が置かれている。昨夜の残りだ。既に電子レンジで温めたらしく、それぞれからは湯気が立ち上っている。

よく全部が電子レンジに入ったなと思いつつ椅子に座り、その左隣、六つ上の兄である歩人（いぶひと）の定位置だった椅子にオセロを座らせる。その後、智美が純一の右、というか斜め右に座る。長細い形状のテーブルなので少し飛び出すようになっていたのだ。

昨日の夕食の時もこの位置に座って食事をした。目の前に食べ物があるもの、オセロは食べていいのかわからないのか、不安そうに純一と智美と食事を見比べていた。仕方なく純一が食べさせてやるとオセロは目を見張り、その後は両手で掴みながらがついていた。

今日も目の前に食べ物があるというのに二人をちらちらと見ては肉じゃがに手を伸ばし、引っ込めてはまた伸ばしを繰り返している。と、

ぐくぐく

オセロの腹が鳴いた。

「ほら、お腹が空いてるみたいだからじゅんちゃん、食べさせてあげて」

「へいへい」

拾ってきたのは純一だ。一応自分が世話をするのが責任だろうと肉じゃがの肉を人参と箸でつまみ、オセロの口元へ運ぶ。

だが、オセロは急に立ち上がると純一達から急いで離れ、壁まで行くとそこで頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。心なしか震えているようにも見える。

「Cena terdile……Cena terdile……Cena

a t e r d l e ……」

一人で震えながら何かを呟き続けるオセロ。

純一は伸ばした箸の先につままれた肉を見つめ、ぱくつと口に入れた。

瞬間、智美の平手が純一の頭をはたく。

「食べてないで、オセロちゃんのとこに行つてなんとかしてきなさい」

「わかつたけど、叩かんでも……面倒臭い」

ぼろつと心情を吐露しながら箸を置き、小さくなって震えているオセロの側に行く。純一が彼女の肩に手を置くと、ビクツと肩が跳ねるのを感じた。

一体何に怯えてるんだと首を傾げ、体育座りのように膝を曲げて、そこに顔を押し付けているオセロを抱え上げた。元の椅子に座らせるが、しかしオセロは依然震えたままだ。

「とりあえず、頭でも撫でてあげたら？」

「あ、ああ……」

言われた通りに行ってみると、オセロは目の端から涙をこぼしながら顔を上げ、純一を見上げてくる。

「ほら、何か食べさせて」

慌てて肉じゃがのじゃがいもを箸で突き刺し、オセロの口に入れた。

驚いたように目を丸くするオセロに純一は自然とその頭に手を置き、無意識の内に微笑みながら優しく撫でる。

だが、何故か余計に泣き出してしまった。何で！？ と純一は慌てるが理由がわからない。昨夜はおいしそうに食べていたからじゃがいもがまずいということはないはずだ。なら何故？

目を擦るオセロにおろおろとしてしまいながら、その様子を見て愉しそうに笑っている母親に純一は気付いた。

「何で笑ってるんだよ。つーか何で悪化したわけ？」

「違う違う。今度のは嬉し泣きよ」

「嬉し泣き？」

そう、と智美は頷く。

「昨日のことから思ってたことだけど、その子、ずっと誰かに虐げられながら生きてきたんじゃないかしら。お腹が鳴ってからの、さっきの怯えようからしても。でも、じゅんちゃんに優しくされたことが嬉しい誤算だった。だから泣いちゃったんだと思うのね」

「……」

一体どんな生活をしてきたのか。腹が鳴ったくらいで怯えなければならぬ生活など想像が出来ない。ゆつくりと頭を撫でてやりながら右手で箸を掴み、まだ泣きじゃくるオセロの口に純一は食べ物運び続けた。

食べ終えた純一達がゆつくりしていると、純一の腕の中に移動したオセロはすやすやと眠りに就いた。泣き疲れたのだろう、頬は純一が着ているシャツで拭ったが、目の回りは赤くなり、少し腫れている。

「寝ちゃったわね」

「うん」

智美はオセロの頭を撫でていたが、よし、と言って立ち上がるとリビングから出て、外出用の服に着替えて戻ってきた。

「ちよっと買いい物に行ってくるから。オセロちゃんの生活用品を買い揃えないといけないし。流石にその恰好は、ね」

苦笑いするを智美。たしかに、素っ裸にシャツ一枚の幼い女の子（推定小学四年生）を抱えた高校生男児、という絵はあまりいいものではないだろう。

「母さんがいない間に変なことしちゃ駄目だからね」

「当たり前だ」

「ならいいけど。じゃあいつてきます。二時間ぐらいで帰るから、ちゃんと勉強しておくのよ」

「わかってるって」

そう、と智美は返し、買い物バッグを片手に出掛けていった。  
車庫の前にある座敷から車を見送り、二階に上がると再びオセロをベッドに寝かせて机に向かう。

一時間経った頃だろうか。毎週提出することになっている数学の課題、4STEPをの答え合わせをしていると横からお呼びがかかった。

「ん……じゅん、いちい……？」  
「ん？」

純一が右に首を回すと、半身を起こしたオセロが右目をを擦りながらこつちを見ていた。どうやら目が覚めたらしい。とがった耳を力無く下に垂らしながら、オセロはベッドの上で縁に体を寄せると純一の服を掴んだ。

にこつと笑うオセロに純一は小さく笑い返し、少し椅子の高さを下げてから抱き上げ、自分の太股に座らせて胸に体を預けさせる。

「じゅんいちい。じゅんいちい」

嬉しそうに純一の顔を見上げながら何度も名前を呼ぶオセロ。

食事のことがあったからか、オセロはかなり純一に懐いたようだった。

(面倒臭いことになるってわかってたはずなのに、何で拾っちゃまったんだろうな、俺は。施設に容れておけば楽だったろうに……)

「じゅんいちい。B e n e w y e n n u i t ?」

そう言っただけオセロが指差したのは、机の上に拡げられた4STEPだった。

(これは何、的なあれか？ それとも何やってるの的なほうか？言葉が通じないってのは本当に不便……、そうだ！)

「いいこと思いついた」

一時間後。

「ただいまー」

「丁度二時間で智美が帰ってきた。手には中身の詰まった紙袋と買  
い物バッグを提げ、重そうにしながら玄関にどさつと置く。」

「智美が一旦腰を下ろして靴を脱いでいると、後ろのほうから階段  
の軋む音が降りてきた。」

「おかえり、母さん」

「ただいま。オセロちゃんの服のサイズがイマイチわかんなかった  
から、適当にたくさん買ってきたの。ついでにプリンとかゼリーと  
か、おやつも買ってきたから」

「ふうん。……（ほら、オセロ）」

「……」

（ん？）

「後ろで何かこそそそとしているのを感じながら靴を脱ぎ、智美が  
後ろを振り返ると、階段の下に純一を置き去りにし、目の前にオセ  
ロが一人で立っていた。」

「オセロは何やら緊張している様子だったが、不安そうな表情をし  
ながらも、」

「あ、りがと。おかーさん」

「え？ と智美はフリーズし、目の前のオセロと階段の下にいる息  
子を見比べる。」

「え？ え？」

「現状を理解しきれていない母親に面倒臭さを覚え、純一は一つた  
め息をついた。」

「もっかい言ってやれ、オセロ」

「ありがと、おかーさん」

「えっと……」

「智美はしゃがんでオセロに視線を合わせ、」

「今、ありがとって言ったの……？」

「呆然とそう呟き、がばつと抱きしめた。」

「何、オセロちゃん、日本語が話せるようになったの？」

「まだ単語単語だけだな。一つ一つに指差しながら教えていったら、」

家の中のものはあらかた覚えたよ。動きとかは難しいから、『ありがとう』と『ごめんなさい』だけしか教えてない」 感謝や謝罪の言葉を教えた純一もすごいが、それを覚えてしまったオセロには畏怖の念を抱かされる。だが、それは喜ばしいことであり、嫌悪するようなことでは決してない。オセロを抱きしめながら智美は抱き上げた。

「どーいたしました。オセロちゃん、ちょっと着替えてこよっか。お母さん、たくさん買ってきたのよー」

智美は片手でオセロを抱えながら紙袋と買い物バッグを逆手に提げ、リビングへすっこんでいくが、

「じゅんいちいー……」

悲しそうな顔をしながらオセロは純一に手を伸ばした。言葉はそれだけだったが、それでも離れたくないというオセロの気持ちはひしひしと伝わってくる。純一は二階に上がるうとしていたのだが、オセロの悲しそうな声と、母親のじとーとした視線に負け仕方なく側に行く。そしてオセロの頭の上にはすっくと手を置いた。

「着替えたら呼んでくれ。そしたらまた降りてくるから」

その時、純一はオセロの白目の部分が一瞬、淡い青色に輝いたような気がした。だがやはり気のせいだったのか、はっとした時にはただの白色にしか見えなかった。

泣きそうだった顔は落ち着き、純一の言葉を理解したかのようにオセロはおずおずと頷いた。

それを確認した智美はリビングへと引っ込み、純一は自室に戻った。

「ったく」

どかっとして椅子に腰を下ろして純一はため息をつくとき、机に片肘をつき頬杖をついた。片手で古文単語帳をめくる。

(別に子供は嫌いじゃないし、懐かれるのも嬉しい)  
けど、

(面倒臭い……)

純一の中にあるのは、これだけだ。ただ面倒臭い。人が嫌いなわけではないが、自分から関わろうとすることはまずない。

いつからだろうか。物事に対してこんなにも面倒臭さを覚えるようになったのは。昔はそんなことはなく、他の子のように進んで遊んだりしていたのだが、少なくとも小学三年の頃には今のような面倒臭がりになっていた。

自然と今のような性格になっていったのか、それとも何か大きなきっかけがあつてガラツと変わったのか。きっかけがあつたのなら、それは何なのか。

しかし、いくら考えたところで出てくるはずもない。考えてもわからないことはわからない、つまりそれは純一の嫌いな面倒臭いに当て嵌まる。その疑問を頭の中から追いやり、単語帳に集中

『じゅんちゃん、ちよつと降りてきてー』

できず、ため息をつきながら手の中のものに赤シートを挟んで閉じ、右手に提げながらリビングに行く。真下にあるリビングから母親の黄色い声が聞こえていた気がしたが……。

「何、母さん」

入るなりそう言った純一はしかし、二の句が継げなかった。

智美は何やら興奮しているようで、しばらくしてからリビングの入口で呆然としている息子に気づいた。

「ほらじゅんちゃん、見て見て！ すっごいかわいいのオセロちゃんー！」

そう言つて智美は純一の前にはずいっとオセロを突き出した。さっきまで着ていた純一のＴシャツではなく、今は薄緑色のワンピースを着ている。丈は膝より少し下くらいまでで、右の裾には回りより少し濃い色で何かの花が描かれているが、何の花かはわからない。形からしてボタンの仲間か何かだろう。本人も少しは喜んでいいのか、裾をくいくいと引っ張っている。

「短パンとかスカートとかいろいろ買ったんだけど、このワンピースが一番似合ってるのよ。かわいくない？」

「あ、うん……思う」

たしかに似合っている。薄緑と灰色の髪とがマッチし、互いが互いの色を映えさせていて、尖った耳もアクセントをつけるようにぴったりだった。そこらの子供と比べたらかなり浮くことだろう。もちろん良い意味で、だが。

純一の素直な感想がそれだった。そして、さっきから言いたかった言葉を口にする。

「その服の量、何？」

純一が指を差した二人の横には、一メートル程の高さに積み上げられた大量の服があった。さっき持って入ってきた袋の容量よりも明らかに多いだろうというその山を智美は一瞥し、

「何って、買ってきた服よ」  
当然のように答える。

あ、そうと呟いき深く考えないことにした。車に積んでおいたのを後から持っておりたりしたのだろう。

「ほら、じゅんちゃんもかわいいって。よかったねーオセロちゃん」  
「じゃんいちい、かわいい」

「いや、俺のことじゃないが……まあ、似合ってるぞ」  
そう言われてオセロはにっこりと笑い、純一にしがみつく。

「でも、どうしようかしらねえ」  
智美が首を傾げ、オセロを難しい顔で見つめる。

「何が」

「明日は平日でしょ？ そしたらお母さんは仕事だし、じゅんちゃんは学校だしで、誰も家にいられなくなるじゃない。オセロちゃんはどうしようって話になるわけ」

「そっか。流石に一人にはしておけないしな……」  
「？」

何の話をしているのかわかっていないオセロは純一を見上げなが

ら小さく首を傾げた。うーんと唸りながら壁を睨みつける。そこで壁に掛けられたものに目がいった。

「……ばーちゃんは？」

「え？ ばーちゃん？」

ばーちゃんとは智美の母親で、名を典子という。風篠市に住み、今は一人でマンションに住んでいる。

うん、と頷きながら壁に掛かっている写真から目を離しオセロを見下ろす。

「ばーちゃん、今仕事とかもしてないんだよな。だったら俺か母さんがいない間は預かってもらえないのかな」

智美はしばらく押し黙り、

「それしかないわね。ちょっとおばーちゃんに電話してみる」

すぐに繋がったらしい、いくらか話すと智美は純一に頷いて見せた。どうやら了承を得られたようだ。

（よかった、これで何とかなる……）

「？ じゅんいちい？」

純一は腰に抱き着いている厄介な拾いものを見下ろしながら、とりあえずは問題をクリアしたことに胸を撫で下ろした。

しかし、それはあくまで『とりあえず』であり、問題は山積みだ。そのことを思い出して純一は嘆息し、学校に出された課題をすべくオセロを抱え上げて二階に上がっていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5747p/>

---

契約と誓い

2011年2月2日13時40分発行